

即身仏に見る日本的な仏教の特性

駒沢女子大学 モリス・ジョン

<キーワード>

即身仏、即身成仏、密教

即身仏とは、自らをミイラ化した「この身体のままの仏」のことであり、修験道や真言宗、日本の東北地方にある聖なる山である出羽三山などと密接に関連している。これは基本的には近世初期の現象であったが、その解釈の大半では、真言宗の即身成仏という教義、また弘法大師入定説を中心に据えた理解をしている。確かにこの即身成仏という教義は、即身仏の思想史を理解するうえでは極めて重要なのだが、それ以外にも細部を把握する必要がある。さらにこうした仏としてのミイラが社会でどのような役割を演じたのかも、さらに探究すべきである。本発表では、即身仏の思想史に関する文脈を取り上げる。その関連で、木食や、密教で即身即身として知られる身体成仏、また修行者の実践を支え彼が不朽のミイラと化した後にはそれを崇拜の対象とする具体的な社会的文脈を考察する。そうした考察において本発表では、こうした習慣の特に日本的な文脈を確かめるとともに、日本の密教の特徴としてどのような意味があるのかを探る。

儀礼や食事規定での修行による成仏や、山岳信仰の日本的モデルを把握するための便利な理論的枠組みの1つが、Tullio Lobetti氏が最近著したモノグラフにある。¹ Lobetti氏は即身仏に関して数ページを割いて論じており、そうした習慣を *corporis ascensus* (昇華する身体) と特徴づけている。つまり、身体が深遠ないしは超越的な状態へと昇華し、そこでは通常の物理特性がもはや当てはまらなくなるのだ。そうした死が全面的に合理化され、他人を助ける力が湧きあがる。

この *corporis ascensus* というパラダイムは、木食といった日本仏教の食事規定にも当てはまると見ることもできる。それが身体成仏という点にまでは至らない場合であっても。そうした諸派においてすら、木食の本質的な目的としては、世俗の食物ではなく霊的なパワーと身体純粋性をもたらす食物を食することによって、身体成仏へと向かわせることがある。食事の実践で進行を身体で実現するという意味での *corporis ascensus* は、木食を実践する殆どの人たちに該当する。またこのパラダイムは、天台宗の回峰行の僧侶たちや、自分の体に無数の神々を宿すことで悟りを得たとされる弾誓 (1552-1613年)、その他食行身禄 (1671-1733年) にあるような食事と身体の実践にも該当する。この実践は即身仏を反映したものだが、伝統と教義という面では、まったく別の文脈に由来する。

このように本発表では Lobetti 氏の理論を用いて各種の実践の類似性を解明し、同じ文脈に属するものであることを示し、それにより即身仏というものをそれに固有の文脈で提示する。即身仏の崇敬が明治期以降に衰えた理由としては、明治政府が発効させた法律という問題も確かにあるのだが、食事習慣と身体成仏の悟りという大きな枠組みが衰えたことは、より重大な要因である。だが本発表では、即身仏にみる日本的な仏教の特性を指摘し、両者が共に同じ思想史のカテゴリーに属するものであることを解き明かす。

¹ Lobetti, T. *Ascetic Practices in Japanese Religion* Routledge, New York 2013 p131-136